広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書　第61集

皇渡古墳発掘調査報告書

1987

財団法人 広島県埋蔵文化財調査センター

皇渡古墳発掘調査報告書

1987

財団法人 広島県埋蔵文化財調査センター

例　　言

1．本書は，昭和61（1986）年度に三良坂町から委託を受け，財団法人広島県埋蔵文化財調査センターが実施した農村基盤総合整備事業（中山集落道路工事）に係る皇渡古墳（双三郡三良坂町大字仁賀字中山1827－2及び1827－4番地）の発掘調査報告書である。

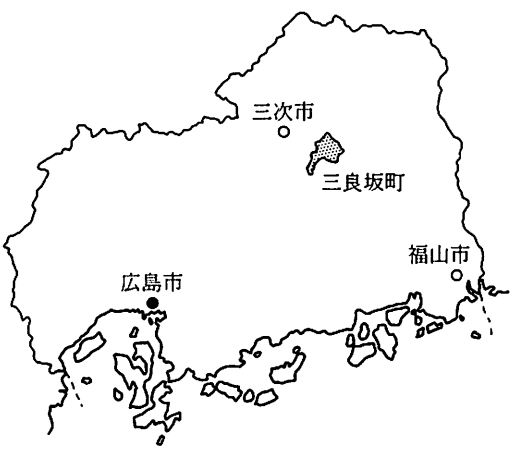
2．発掘調査は，財団法人広島県埋蔵文化財調査センター調査研究員 山田繁樹，佐伯博司が実施した。

3．遺構の実測，写真撮影は山田，佐伯が行い，遺物の実測，写真撮影，製図および本書の執筆，編集は佐伯が行った。

4．挿図と図版の遺物番号は同一である。

5．本書に用いた方位はすべて磁北である。

6．本書に掲載した第2図は，建設省国土地理院発行の1：25,000の地形図（三良坂）を使用した。



三良坂町位置図

目　　次

Ⅰ　はじめに……（1）
Ⅱ　位置と環境……（2）
Ⅲ　調査の概要……（6）
Ⅳ　出土遺物……（12）
Ⅴ　まとめ……（19）

図版目次

図版 1-a　遠　景（南から）
　　b　近　景（南から）
図版 2-a　石室検出状況（南から）
　　b　石室床面検出状況（南から）
図版 3-a　石室検出状況（西から）
　　b　石室内遺物出土状況（北から）
図版 4-a　周溝及び掘り方の調査状況（南から）
　　b　作業風景
図版 5　石室内出土土器（Ⅰ）
図版 6-a　石室内出土土器（Ⅱ）
　　b　同　上　耳環・玉類
　　c　昭和 34（1959）年出土の遺物

表目次

須恵器観察表……(14)～(16)

挿図目次

第 1 図　皇渡遺跡出土土器実測図（1：3）……（2）
第 2 図　主要遺跡分布図（1：25,000）……（3）
第 3 図　周辺地形図（1：5,000）……（4）
第 4 図　周辺地形測量図（1：500）……（6）
第 5 図　墳丘測量図（1：200）……（7）
第 6 図　墳丘土層断面実測図（1：80）……（8）
第 7 図　石室実測図（1：80）……（9）
第 8 図　石室内遺物出土状況（Ⅰ）（1：20）……（9）
第 9 図　石室内遺物出土状況（Ⅱ）（1：15）……(11)
第10図　石室内出土土器実測図（Ⅰ）（1：3）……(13)
第11図　石室内出土土器実測図（Ⅱ）（1：3）……(14)
第12図　石室内出土耳環・玉類実測図（2：3）……(17)
第13図　包含層出土土器実測図（1：3）……(18)

I はじめに

双三郡三良坂町は，昭和59（1984）年度に，備北広域農道と県道16号線を結ぶ総長553mの中山集落道路の整備拡張を計画した。これは，三良坂町が仁賀地区の農業の近代化・集約化，地域住民の生活環境の向上などを目的に，昭和52～60（1977～1985）年度にかけて実施している農村基盤総合整備事業の一環として計画されたものである。近年，農村地域における交通をめぐる状況は著しく変わってきており，本地域も農業の機械化により，大型機械が普及している。この計画は，中山集落道路の整備拡張により，これら交通の円滑化をはかり，農業生産の効率化及び地域住民生活の利便をはかるためのものである。

三良坂町では，昭和59年6月広島県教育委員会（以下「県教委」という）へ中山集落道路整備拡張計画予定地内1659㎡の埋蔵文化財の有無について照会を行った。県教委は，踏査を実施した結果，皇渡（おうわたり）古墳が存在することを確認し，三良坂町に対して現状保存ができない場合は，発掘調査が必要な旨を回答した。三良坂町は，この計画が地域振興のため必要であり，また，宅地及び連絡道路等の条件から設計変更等による古墳の現状保存は困難であるため，事前に発掘調査を行うことにした。しかし，三良坂町では発掘調査を行う態勢が整わないことから，昭和59年10月財団法人広島県埋蔵文化財調査センター（以下「センター」という）に調査を依頼した。センターでは，昭和60（1985）年度の発掘調査実施は他の事業との関係で困難であったため，60年度の調査はできない旨を回答した。その後，昭和61（1986）年度のセンターの事業として実施が可能となったので，昭和61年3月 センターは県教委及び三良坂町と協議を行い，4月に委託契約を締結した。調査は，昭和61年4月7日～5月10日までの約1か月間実施した。また，同年11月には，三良坂町教育委員会と共催で発掘調査報告会を開催した。

本書は，以上の経過をふまえて行った発掘調査の成果をまとめたものである。今後の埋蔵文化財の研究や地域の歴史研究に寄与できれば幸いである。

なお，発掘調査及び報告書作成にあたっては，広島県教育委員会の御指導を得るとともに，三良坂町農村整備課，同町教育委員会をはじめ地元の方々から多大の御協力を得た。また，広島大学理学部地質学教室 沖村雄二氏には，玉類の材質鑑定を行っていただいた。記して感謝の意を表したい。

II 位置と環境

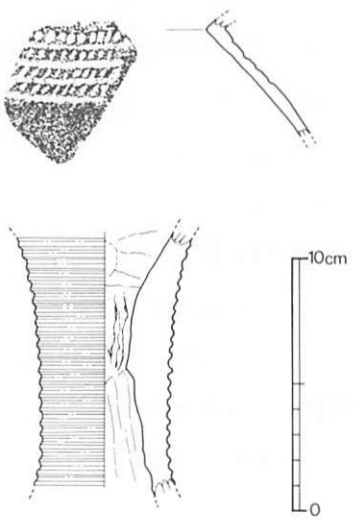
皇渡古墳は，広島県双三郡三良坂町大字仁賀字中山 1827－2 及び 1827－4 番地に所在する。本古墳は，三良坂町の町並から北東に約 3 km，S 字状に蛇行しながら西流する上下川北岸の低丘陵南斜面に位置しており，標高は約 217.5 m，比高は上下川に最も近い水田から約 19 m である。

三良坂町は，県内有数の遺跡密集地である三次盆地の一角にあり，東は甲奴郡総領町，西は三次市，南は双三郡吉舎町，北は庄原市にそれぞれ接している。町の南部には南東から北西に馬洗川が，北部には東から西に上下川が流れて，三次市との境で両河川が合流している。両河川とその支流によって形成された狭い平野部や河岸段丘上は標高 175～200 m で，水田が営まれている。町の中央部は標高 250～300 m，水田からの比高約 50～100 m の低丘陵が広がり，山林となっている。なお，原始・古代の遺跡は，これらの低丘陵上及び河岸段丘上に多く分布している[1]。

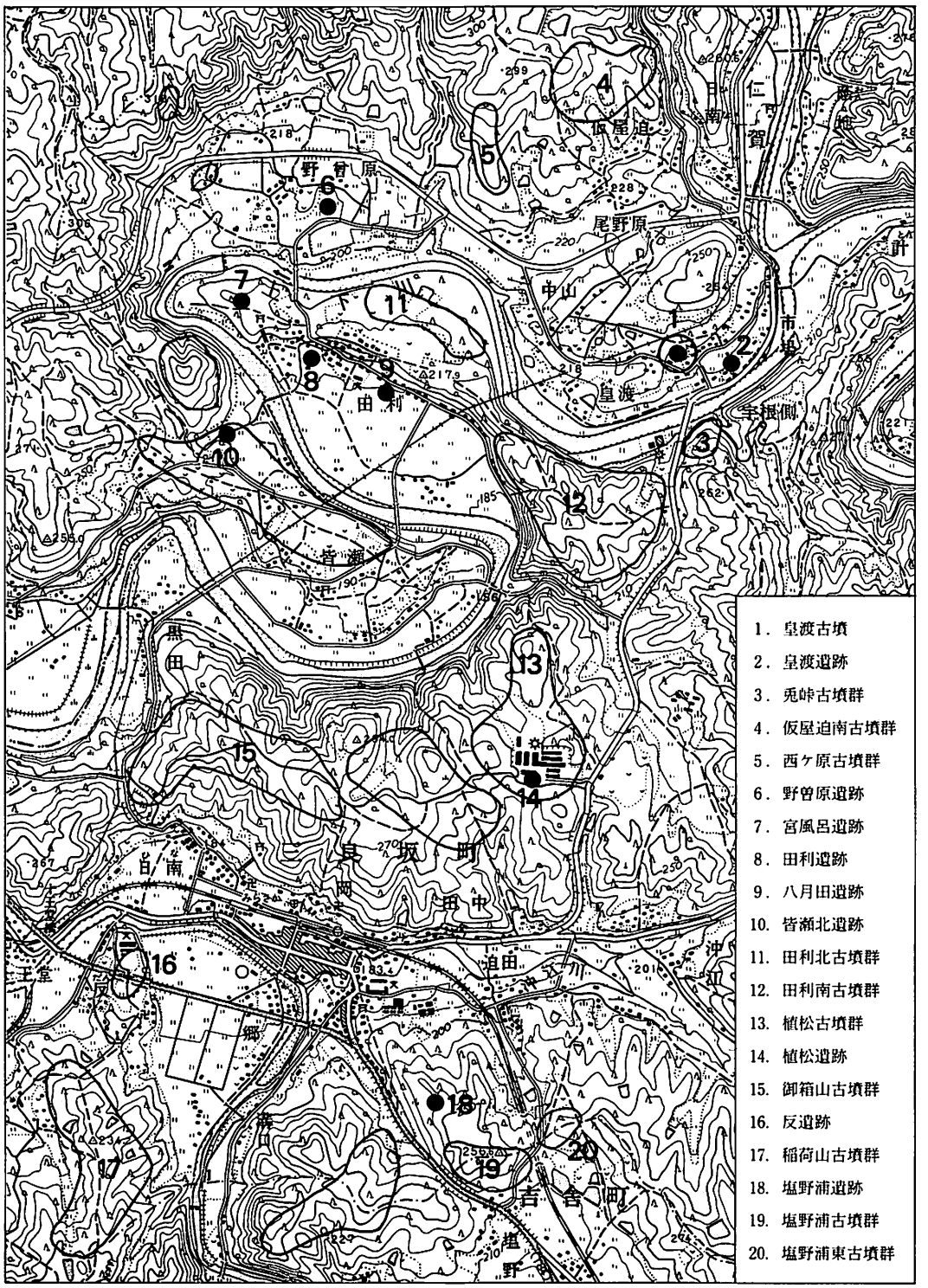
上下川流域の尾野原，中山，野曽原，田利，皆瀬の一帯は，戦前までは畑地や山林原野の多い土地であった。尾野原や田利では大正 10 (1921) 年頃から溜池新設や水路の整備が進められて水田への転換がはかられていった。また，中山，野曽原，皆瀬などでは昭和 24 (1949) 年頃から開墾が進められて，現在のような水田が開かれた。こうして皆瀬古墳群や野曽原古墳群，皇渡古墳などが知られるようになったが，多くの古墳はこの時期の開墾によって消滅している[2]。

町内の遺跡は，その後に分布調査や発掘調査が行われて，原始・古代の遺跡や中世の山城などが次第に明らかになりつつある。以下，現在知られている遺跡や調査された主な遺跡について述べてみたい。

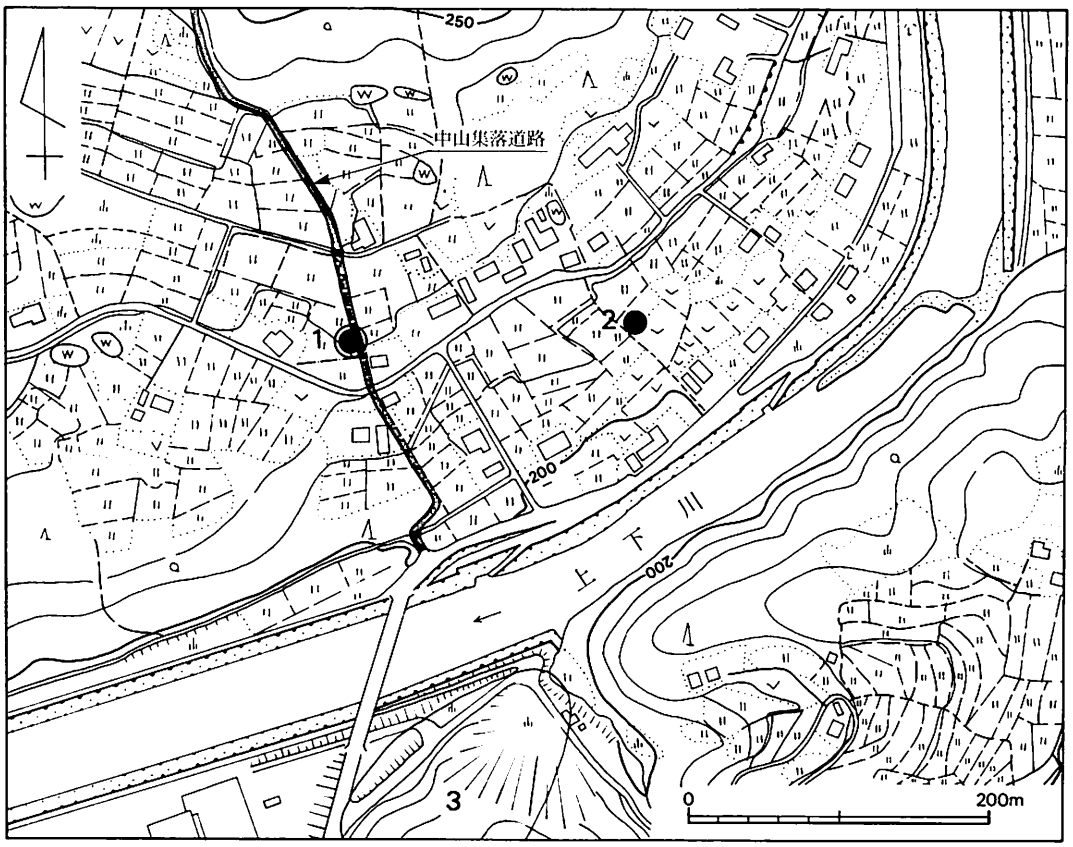
旧石器時代の遺跡には，塩野浦遺跡[3]と沖江龍王山遺跡[4]があり，それぞれ安山岩製ナイフ形石器，黒耀石製尖頭器が出土している。縄文時代の遺跡としては，早期の土器が出土した植松遺跡[5]，後期の土器とともに多量の石錘が出土した皆瀬北遺跡があり，他に田利，皆瀬，羽木，日南から石斧・石皿などが出土している。弥生時代の遺跡には，昭和 28 (1953) 年に調査された



第 1 図　皇渡遺跡出土土器実測図（1：3）



第2図　主要遺跡分布図（1：25,000，○は古墳群を示す）



第3図　周辺地形図（1：5,000）

（1．皇渡古墳，2．皇渡遺跡，3．兎峠古墳群）

野曽原遺跡があり，中期後半～後期の土器が出土した一辺7～8mの方形竪穴住居跡が確認されている[1]。この他，多量の土器が出土した田利遺跡，反（だん）遺跡などがある。なお，本古墳の発掘区域内で弥生土器を採集したほか，本古墳の東約200mに中期末の土器が散布する皇渡遺跡を新たに確認した。

古墳時代の遺跡としては，大小約4000基の古墳があり，県内で最も多く分布している三次盆地の一角にある三良坂町にも，稲荷山古墳群，植松古墳群など数多くの古墳群がありその中のいくつかは調査されている。

横穴式石室導入前の古墳としては，稲荷山D－2号古墳[4]，植松第1・4号古墳[5]，植松第1号石棺[4]，岡田山第3号古墳[6]，塩野浦古墳群・塩野浦東古墳群[7]，日野迫古墳群[1]などがある。なお，本古墳から南約300mにある兎峠（うさぎだお）古墳群は，崖面に箱形石棺2基が露出している。これらの古墳はいずれも直径10m前後の円墳で，竪穴式石室・土壙・粘土槨・箱形石棺などを内部主体としている。

古墳時代後期の6世紀後半頃になると三次盆地一帯では横穴式石室が普及してくる。町内ではこの時期の古墳としては，御箱山古墳群，仮屋迫南古墳群，野曽原古墳群，かつえ坂古墳群，植松古墳群などが知られているが，調査が行われているのは植松第2・3号古墳[8]があるにすぎない。植松第2・3号古墳は，石室内に須恵器を敷きつめており，本古墳との共通性がみられるが，この時期の横穴式石室の様相についてはなお明らかでないことが多い。なお，この時代の住居跡の調査は現在のところ行われていないが，八月田遺跡や宮風呂遺跡など集落跡と思われる遺跡がある。

奈良～平安時代の遺跡としては，奈良時代の須恵器を出土している八月田遺跡と植松遺跡内の木炭窯[9]が知られているにすぎない。当時，三良坂町は三次市東部，双三郡吉舎町とともに，三谷郡に属していたとされているが，その実態は明らかではない。なお三次市では，三次郡衙跡と推定されている県史跡下本谷遺跡[10]，三谷寺と推定される史跡寺町廃寺跡[11]，上山手廃寺跡[12]などで調査が行われている。

註

(1) 三良坂町誌編集委員会編 『三良坂町誌』 昭和48(1973)年

(2) 広島県双三郡・三次市史料総覧刊行会編 『広島県双三郡・三次市史料総覧』第五篇 昭和49(1974)年

(3) 広島県教育委員会・財団法人広島県埋蔵文化財調査センター 『地宗寺遺跡発掘調査報告』 昭和57(1982)年

(4) 広島県双三郡三良坂町教育委員会 『稲荷山D－2号古墳』 昭和58(1983)年

(5) 第1号古墳は，河瀬正利・向田裕始 「双三郡三良坂町植松第1号古墳」『芸備』第3集 昭和50(1975)年。第4号古墳は，昭和61(1986)年に当センターが発掘調査。

(6) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター 『岡田山第3号古墳発掘調査報告』 昭和59(1984)年

(7) 従来，『広島県双三郡・三次市史料総覧』第五篇などでは，19基全てを塩野浦古墳群としていたが，立地から，東側にある2基を塩野浦東古墳群とする。なお，この2基は，昭和39(1964)年に調査されている。残り17基を塩野浦古墳群とし，このうち2基は，昭和60(1985)年に町教委が調査を行った。

(8) ここでいう植松第2号古墳は，日本考古学協会 『日本考古学年報』24 昭和48(1973)年 で「植松1号古墳」として紹介された横穴式石室を内部主体とする古墳である。植松第3号古墳は昭和60(1985)年，当センターにより発掘調査。

(9) 昭和61(1986)年，当センターにより発掘調査。

(10) 下本谷遺跡発掘調査団 『下本谷遺跡』 昭和50(1975)年
広島県教育委員会 『下本谷遺跡発掘調査概報』 昭和55(1980)年，他。

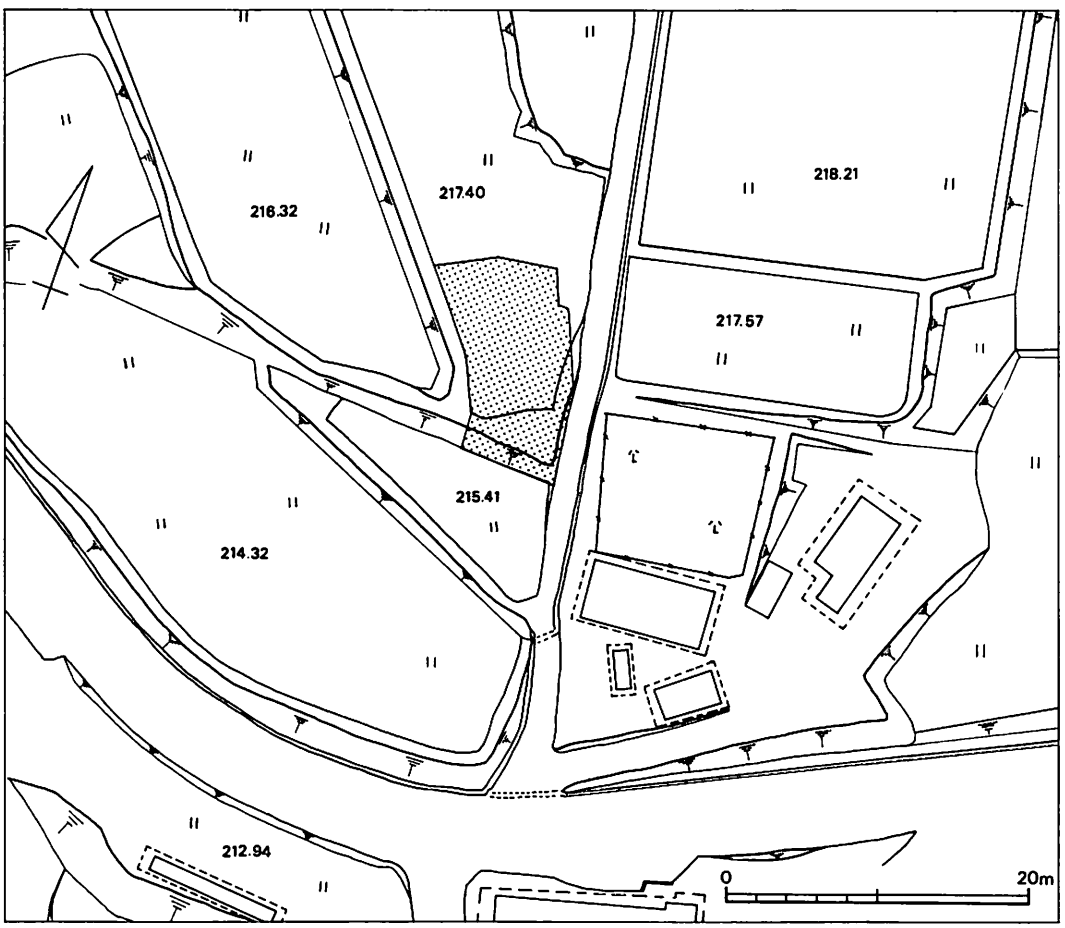
(11) 三次市教育委員会 『備後寺町廃寺』 昭和55(1980)年，他。

(12) 広島県教育委員会 『上山手廃寺発掘調査報告』(1) 昭和54(1979)年，他。

Ⅲ 調査の概要

(1) 現状と経過

本古墳の位置する丘陵周辺は，開墾のためにかなりの削平をうけ，旧地形を留めていない。本古墳の現状は水田で，墳丘東側は町道によって削られており，南側法面に側石の一部が露出していた。なお，昭和34(1959)年の開墾時に石室入口付近が削られたことから，調査が行われて，南に開口する横穴式石室であることが確認され，鉄刀・鉄鏃・須恵器・装身具などが出土している。なお，当時の状況からすると，天井石や側壁の一部はすでに失われ，仕切石が奥壁と誤認されたようである。その時の埋め戻しが不十分だったためか，現状では石室内の部分がかなり落ちこんでいた。



第4図　周辺地形測量図（1：500，アミ目は調査区）

調査は，南側法面の覆土及び，石室内埋土の除去により石室の現状規模，状況を確認するとともに，石室の主軸に直交する基線（A－A′）と，石室内でこの基線と直交する基線（B－B′）によって墳丘を四分割して墳丘の確認を進めた。なお，周溝確認のためトレンチを数本設定した。ただし，耕作の関係から全面排土は行えなかった。

その結果，盛土は削平のため確認できなかったが，墳丘背後に幅3m，深さ0.5mの周溝がめぐる直径約12mの円墳であると推定された。また，横穴式石室の奥壁よりには仕切石があり，この仕切石と奥壁との間の床面には，破砕した須恵器と河原石を敷きつめていることが明らかになった。

(2) 墳丘と周溝

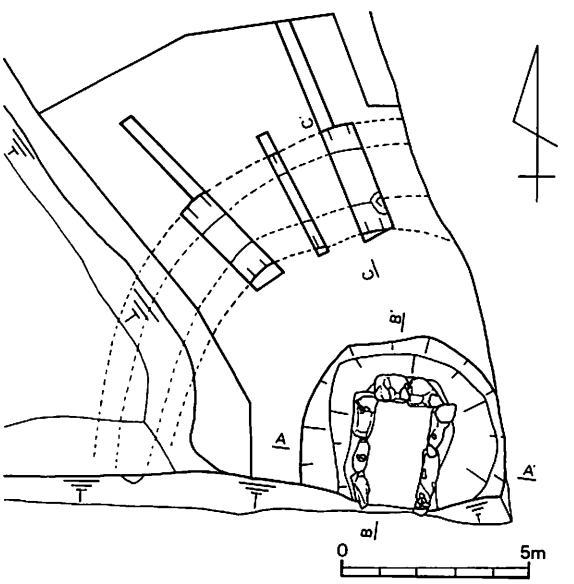
開墾によって，墳丘の大部分は削平されており，周溝も一部を確認したのみである。したがって，墳丘の規模は明確にできないが，確認した周溝の状態から考えて，周溝内側下端を墳端とすると直径約12mの円墳であったと推定される。また，高さも天井石とともに盛土が全て削平されているため，明確にすることができない。

周溝は，上端幅2.5～3.0m，下端幅1.0～1.5m，深さ0.45～0.55mである。墳丘外側の立ち上りは，黒ボクの上から掘り込まれているために明確に確認し得なかった。

(3) 内部主体

内部主体は，南に開口する横穴式石室で石室の主軸はN8°Eである。奥壁上部，側壁上部，玄室入口付近及び天井石は残存していないために石室の本来の規模，封鎖石などの状況は不明である。石室の現状規模は，長さ約2.8m，幅は奥壁直下で約1.6m，南側で約1.35mと石室入口にむかってやや幅が狭くなっている。このことからすると，石室の平面形は石室入口にむかって幅がしだいに狭くなる，いわゆる徳利形をなすものと考えられる。なお，石室の現存高は奥壁で床面から約1.5mである。

奥壁に据えた石の高さは約1.7m，幅0.8～0.9m，厚さ0.7～0.75mの花崗岩質系の自然石2個で，これらを鏡石とし，床面を20cm以上掘り下げ

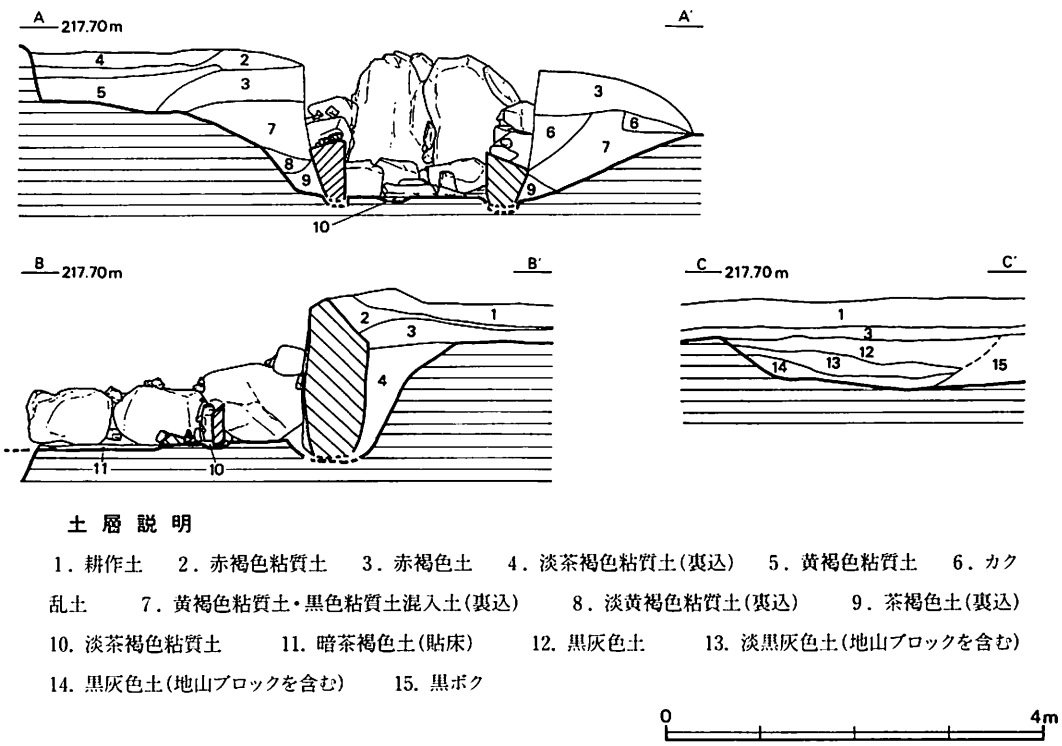


第5図　墳丘測量図（1：200）

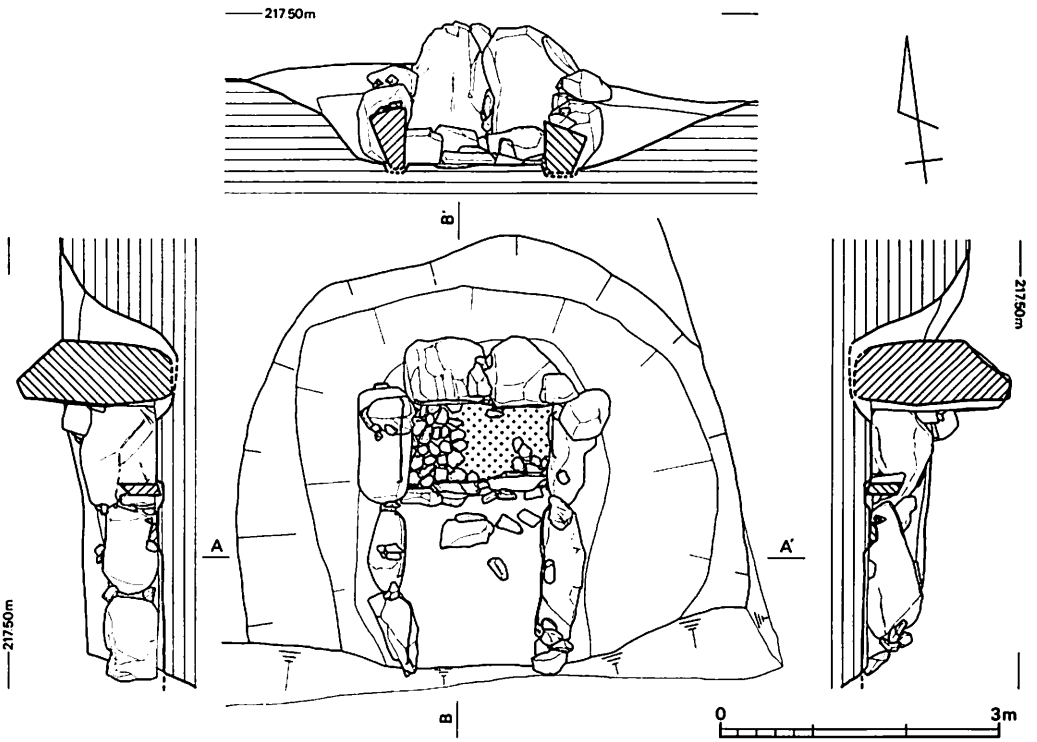
て据えている。なお，2個の鏡石の間には，自然石を利用しているため隙間が生じているので小角礫を詰めている。

側壁は，東側壁に基底石2個と2段目の石1個，西側壁に基底石3個と2段目の石1個及び詰石が残っており，いずれも花崗岩質系の自然石である。各々の基底石は床面を10㎝前後掘り下げて据えており，大きさは高さ0.6～0.9m，幅0.9～1.5m，厚さ0.4～0.6mである。東側壁の2個の基底石はいずれも上方が尖りぎみの不整形の石材で，2個の基底石の間には2段目の側石の安定をはかるためとみられる詰石がある。また，2段目の側石として，奥壁に接して奥行0.6mの不整形な石を小口積みにしている。奥壁の鏡石とこの石に接する基底石との関係は，鏡石の正面側に基底石の端をあてて，鏡石が前方に倒れるのを防いでいる状態にある。

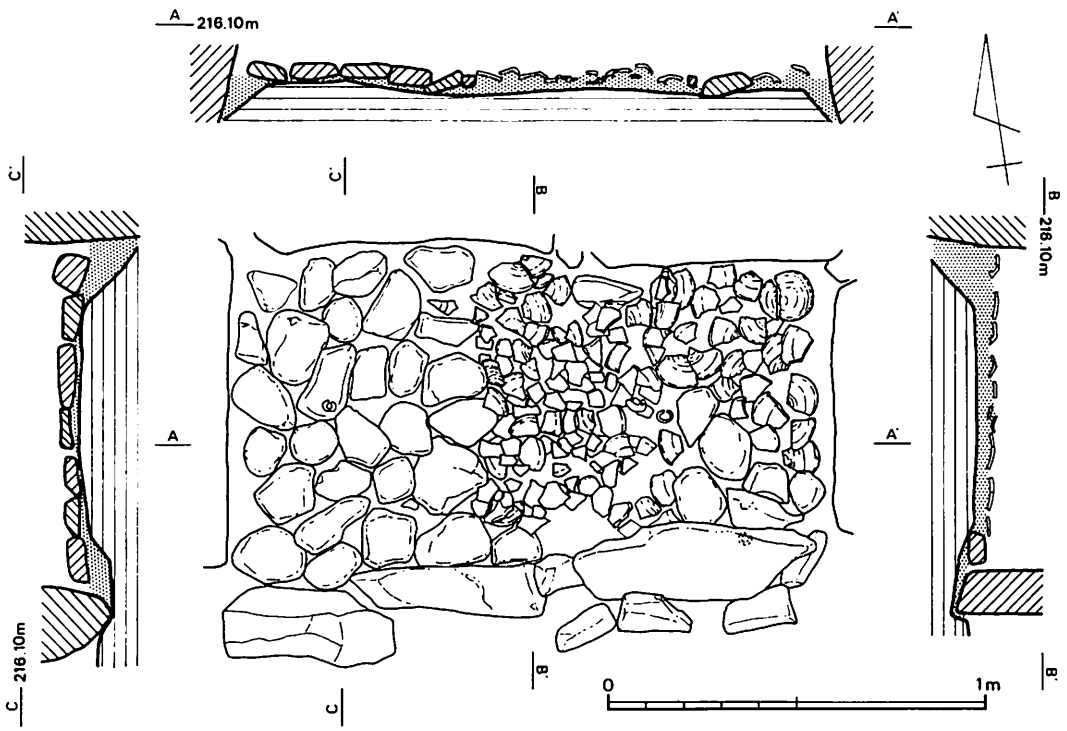
一方，西側壁の3個の基底石のうち，奥壁の鏡石に接する石は他の2個よりもやや大きいものを据えているが，いずれも広口積みである。また，他の2個の基底石はほぼ同じ大きさで上面を揃えており，石材の選択性がうかがわれる。2段目の側石として奥壁の鏡石に接して，高さ0.3m，幅0.3m，奥行0.5mの石を小口積みにし，これらの側石の間には小角礫を詰めている。このように東壁及び西壁に遺存する2段目の側石からすると，



第6図　墳丘土層断面実測図（1：80）



第7図　石室実測図（1：80，アミ目は須恵器）



第8図　石室内遺物出土状況（I）（1：20）

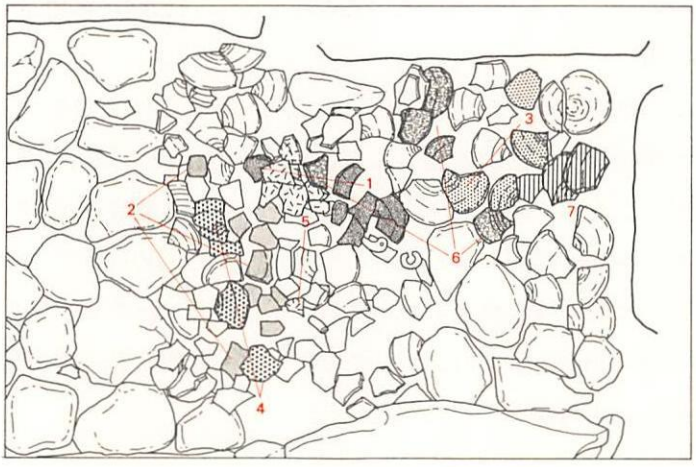
2段目の側石は全体に基底石よりもかなり小さめの石をのせていたと推測される。奥壁の鏡石とこの石に接する西側壁の基底石との関係は，鏡石の側面側に石の角をあてており，東側壁のあり方と状況を異にしている。

石室には，奥壁から0.7～0.9 mの位置に仕切石がある。高さ約40 cm，幅45～65 cm，厚さ10～20 cmの3個の自然石を石室の主軸に直交して，幅約30 cm，深さ10 cm前後の溝を掘り，この中に立て並べている。なお，東側の基底石に接する石と中央の仕切石との間には隙間を補填するために小さな角柱状の石を立てて詰めている。なお，仕切石から南側にかけては，棺台石と考えられる平坦な自然石が床面に配置されている。

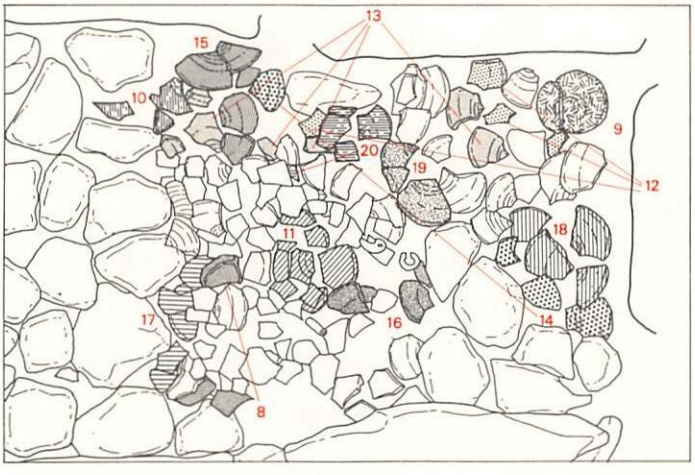
仕切石と奥壁との間の西半分には，10～20 cm大の扁平な河原石を上面の高さを揃えて敷き詰めており，東半分は部分的に敷き詰めた河原石があるものの，大部分は伏せた状態の杯蓋，杯身や椀，坩，高杯の須恵器を割って敷き詰めている。

なお，この部分は石室内に溝を掘り，仕切石を据えた後に石室掘り方の底面上に若干土を入れて整地し，河原石を敷きつめた後，河原石の上面の高さにあわせて，底面の上に土を入れて須恵器片を敷いている。敷きつめられた須恵器は，杯蓋7点，杯身13点，椀1点，坩1点，高杯2点の計24点で，そのうち復元して完形及びほぼ完形となるものは，杯蓋5点（1～3，5，6），杯身6点（9，11，13～15，18），椀（21），坩（22），高杯（24）の計14点，全体の約半数である。須恵器片の出土状況をみると，その場で割ったと考えられるものは杯身の3点（9，18，19）ぐらいで，その他の須恵器は石室内で割れていたものを仕切石と奥壁の間に敷きつめたようである。東側壁直下では比較的大きな破片を，中央付近ではやや小さい破片を部分的に重ねて敷いている。また，その破砕された須恵器片の敷き方から，同一個体で破片がまとまっているもの（1，3，5，6，9～11，15，17～20）と，その間をうめるようにばらばらに敷いてあるものとに分けられる。これは，破砕された須恵器片を敷きつめる順序と関係あるのかもしれない。しかし，その敷き方，破片の大きさには，器種とか完形の有無とかによる規則性はみられない。

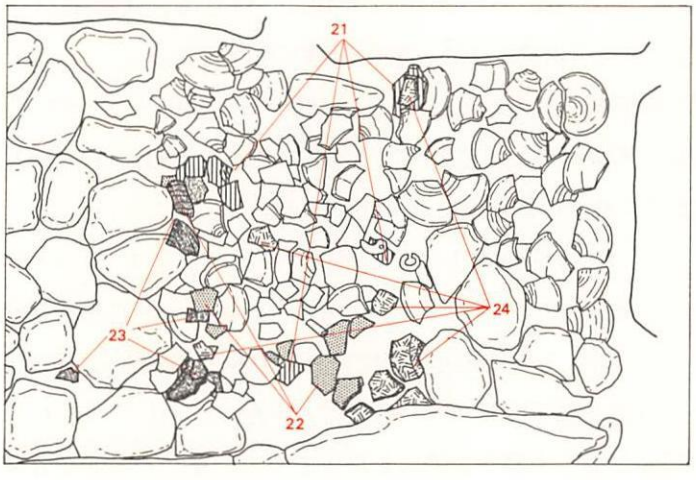
また，これらの須恵器以外に奥壁と仕切石との間からは，耳環5，勾玉1，管玉2，土製小玉2，ガラス製小玉1，琥珀製丸玉1が出土した。このうち，西側の側壁寄りで出土した耳環1は，敷石上面から約17 cm浮いた状態で出土し，東側の土器床及び敷石直上からは耳環2，勾玉1，管玉1が出土した。その他の耳環2，管玉1，土製小玉2，ガラス製小玉1，琥珀製丸玉1は原位置を確認し得ないが，調査時の状況からすると床面にごく近い高さでの出土であることは確かである。なお，仕切石から南側では，昭和34年の調査時に鉄刀・鉄鏃，装身具，須恵器などが出土しているが，今回の調査では須恵器の甕の破片1点が出土しただけである。



杯 蓋



杯 身



椀・坩・高杯

第9図　石室内遺物出土状況（II）（1：15）

また，仕切石から南側では，貼床と考えられる厚さ6cm前後の暗茶褐色土の層を確認した。

(4) 掘　り　方

石室の掘り方の平面形は「U」字状をしている。断面は浅いレンズ状をなしているが，西側では側石から40～50cm，北側では奥壁から50～60cmのところに傾斜変換点があり，そこから西側側石，奥壁にむかって深く掘り込んである。ただし，東側ではこの傾斜変換点があまり明瞭ではない。東側が農道により壊されているが，上端の現存長4.5m，現存幅5.3m，現存高1.3m，下端の現存長3.4m，幅2.7mである。石室と掘り方の壁との空間の裏込めには，淡茶褐色粘質土，地山ブロックを含んだ黒色粘質土，淡黄褐色粘質土，茶褐色土を充填しており，小角礫を若干混ぜている。

Ⅳ 出 土 遺 物

出土遺物には，須恵器・装身具の他，弥生時代の土器片がある。

(1) 土　　器

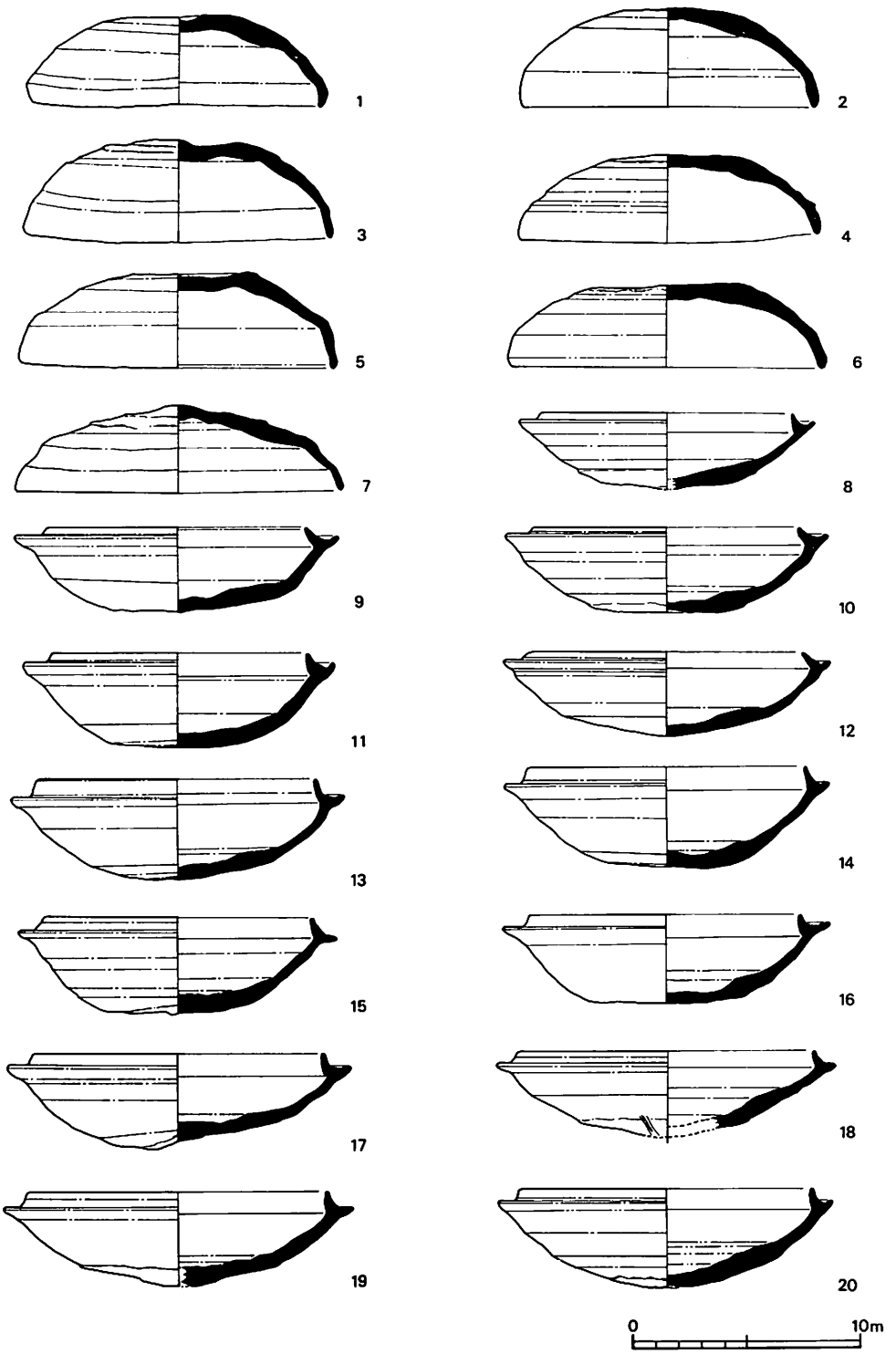
出土した24点は全て須恵器で，器種としては，杯蓋・杯身・椀・坩・高杯がある。なお，杯蓋・杯身は，口径・器高，成形技法，胎土などの違いから分類が可能である。

口径・器高からみると，杯蓋の1～4は口径12.6～13.0cm，器高3.9～4.5cm，5～7は口径13.6～14.4cm，器高3.7～4.2cmでやや扁平な感じを与える。杯身の8は口径11.0cm，受部径13.0cm，器高3.4cmで小ぶりであり，9～16は口径11.2～12.2cm，受部径14.9～15.4cm，器高3.7～4.5cm，17～20は口径12.7～13.0cm，受部径14.9～15.4cm，器高4.1～4.3cmで口径に比べ器高が小さく扁平な感じを与える。

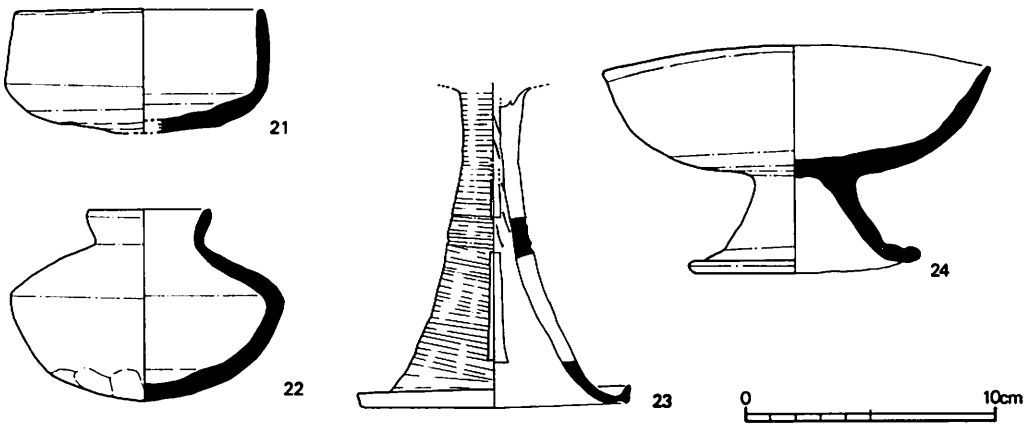
天井部・底部の成形技法でみると，11～14は底部ヘラ削り，1・3～7・9・10・18はヘラ切り後ナデを施し，天井下半・底部上半に一部ヘラ削り，8・15・17・19・20はヘラ切り後ナデのみ，2・16は磨耗・自然釉のため不明である。

胎土でみると，3・7・12～15・17は密で砂粒をほとんど含まず，4・6・8は粗で0.5～3mm大の砂粒を多く含み，その他はやや粗で0.5～1mm大の砂粒を若干含む。

以上の特徴から，8の0.5～3mm大の砂粒を多く含み，他に比べ，口径・器高の小さいもの，11～14の胎土は密か若干砂粒を含む程度でヘラ削りを施しているもの，5～7・17～20の口径にくらべ器高が小さく扁平な感じを与えるもの，及びその他に分類することができる。



第10図　石室内出土土器実測図（I）（1：3）



第11図　石室内出土土器実測図（II）（1：3）

須恵器観察表

番号	器種	法量 (cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	杯蓋	口径 12.6 器高 4.0	天井部はやや丸味をもち，やや高い	天井部上半ヘラ切り後ナデ，天井部下半ヘラ削り，他ヨコナデ，天井部内面仕上げナデ	胎土やや粗，焼成良好，色調灰色，口縁部一部欠損，ロクロ右回転
2	杯蓋	口径 12.7 器高 4.4	天井部は丸味をもち，やや高い	磨滅のため詳細不明	胎土やや粗，焼成不良軟質，色調白色，完形
3	杯蓋	口径 12.5 ～13.5 器高 4.5	天井部は丸味をもち，やや高い	天井部ヘラ切り後粗いナデ，他ヨコナデ，天井部内面仕上げナデ	胎土密，焼成良好・焼けひずみ，色調暗灰色・自然釉，完形
4	杯蓋	口径 13.0 器高 3.9	天井部は丸味をもち，やや高い	天井部上半ヘラ切り後ナデ，天井部下半ヘラ削り，他ヨコナデ	胎土粗，焼成良好，色調暗灰色・自然釉，2/3残存，ロクロ左回転
5	杯蓋	口径 13.7 器高 4.2	天井部は平坦気味で，やや低い	天井部上半ヘラ切り後ナデ，天井部下半ヘラ削り，他ヨコナデ，天井部内面仕上げナデ	胎土やや粗，焼成良好，色調灰色・自然釉，ほぼ完形，ロクロ右回転
6	杯蓋	口径 13.6 器高 3.7	天井部は平坦気味で，やや低い	天井部上半ヘラ切り後ナデ，天井部下半ヘラ削り，他ヨコナデ，天井部内面仕上げナデ	胎土粗，焼成良好，色調暗灰色，完形，ロクロ右回転

番号	器種	法量 (cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
7	杯蓋	口径 (14.4) 反転復元 器高 3.8	天井部はやや平坦で，やや低い	天井部上半ヘラ切り後ナデ， 天井部下半ヘラ削り， 他ヨコナデ	胎土密，焼成良好・焼けひずみ，色調灰色・自然釉， 1/2 残存，ロクロ右回転
8	杯身	口径 (11.0) 器高 3.4 受部径(13.0) 反転復元	底部は丸味をもち立ち上りはやや内傾	底部ヘラ切り後ナデ， 他ヨコナデ	胎土粗・0.5～3㎜大の砂粒多く含む，焼成良好， 色調黒色自然釉， 1/2 残存
9	杯身	口径 11.3 器高 3.7 受部径 14.3	底部はやや丸味をもち，立ち上りは内傾した後に上半は立ち上る	底部下半ヘラ切り後ナデ， 底部上半ヘラ削り後ナデ， 他ヨコナデ	胎土やや粗，焼成良好， 色調黒灰色・自然釉， 完形，ロクロ右回転
10	杯身	口径 (11.6) 器高 3.9 受部径(14.2) 反転復元	底部はやや丸味をもち，立ち上りは内傾	底部下半ヘラ切り後ナデ， 底部上半浅いヘラ削り後ナデ，他ヨコナデ	胎土やや粗，焼成良好， 色調黒灰色， 1/2 残存，ロクロ左回転
11	杯身	口径 11.2 器高 4.1 受部径 13.8	底部は丸味をもち立ち上りは内傾した後に上半は立ち上る	底部雑なヘラ削り， 他ヨコナデ， 底部内面仕上げナデ， 立ち上り折り込み	胎土やや粗，焼成不良・軟質， 色調灰白色， 完形，ロクロ左回転
12	杯身	口径 (11.8) 器高 3.7 受部径(14.4) 反転復元	底部は丸味をもち立ち上りは直線的に内傾	底部ヘラ削り？ 他ヨコナデ， 底部内面仕上げナデ	胎土密，焼成不良・軟質， 色調灰白色， 1/3 残存，ロクロ左回転？
13	杯身	口径 12.1 器高 4.4 受部径 14.6	底部は丸味をもち立ち上りは内傾した後屈曲して立ち上る	底部粗いヘラ削り， 他ヨコナデ	胎土密，焼成良好， 色調暗灰色， 完形，ロクロ左回転
14	杯身	口径 12.2 器高 4.5 受部径 14.3	底部はやや丸味をもち，立ち上りはやや内傾	底部粗いヘラ削り， 他ヨコナデ	胎土密，焼成良好， 色調暗灰色， 完形，ロクロ左回転，
15	杯身	口径 11.7 器高 4.3 受部径 14.0	底部はやや平坦気味で，立ち上りは内傾	底部ヘラ切り後ナデ， 他ヨコナデ	胎土密，焼成良好， 色調暗灰色・自然釉， 完形
16	杯身	口径 11.8 器高 4.0 受部径 14.4	底部は平坦気味で立ち上りは強く屈曲して立ち上る	底部自然釉のため不明， 底部内面に仕上げナデ， 他ヨコナデ， 立ち上り折り込み	胎土やや粗，焼成良好， 色調暗灰色・自然釉， 2/3 残存

番号	器種	法量 (cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
17	杯身	口径 12.7 器高 4.2 受部径 15.1	底部はやや平坦気味で，立ち上りは内傾した後，屈曲して立ち上る	底部ヘラ切り後ナデ， 底部内面に仕上げナデ， 他ヨコナデ， 立ち上り折り込み	胎土密，焼成良好， 色調暗灰色・自然釉， 2/3 残存
18	杯身	口径 12.9 器高 (4.1) 受部径 14.9	底部は丸味をもち立ち上りは内傾	底部下半ヘラ切り後ナデ， 底部上半雑なヘラ削り後ナデ，他ヨコナデ	胎土やや粗，焼成ややあまい， 色調灰褐色・自然釉，一文字ヘラ記号，底部欠損，ロクロ右回転
19	杯身	口径 (13.0) 器高 4.1 受部径(15.4) 反転復元	底部は丸味をもち立ち上りは内傾	底部ヘラ切り後ナデ， 底部内面に仕上げナデ， 他ヨコナデ	胎土やや粗，焼成普通， 色調灰色・自然釉. 1/2 残存
20	杯身	口径 (12.8) 器高 4.3 受部径(14.8) 反転復元	底部は丸味をもち立ち上りは内傾	底部ヘラ切り後ナデ， 底部内面に仕上げナデ， 他ヨコナデ	胎土やや粗，焼成不良・軟質， 色調灰白色， 口縁部 1/3 残存
21	椀	口径 9.7 ～10.4 器高 4.0	胴部・口縁部やや内傾，端部丸く，底部丸味をもつ	底部ヘラ切り後粗いナデ，ら線状に粘土残る。底部内面に仕上げナデ，他ヨコナデ	胎土密，焼成ややあまい， 色調白～灰色， ほぼ完形
22	坩	口径 4.8 器高 7.7 胴部最大径 10.8	胴部よく張り出し「く」字状，口縁部外反気味に短くのび，端部は丸い	底部外面は不定方向のヘラ削り，他ヨコナデ	胎土やや粗，焼成ややあまい， 色調淡灰色， ほぼ完形
23	高杯	脚裾部径 10.5 脚部高 12.6	胴中央部に2条の凹線がめぐり，その上部と下部に2方向から長方形のスカシ。脚部長くラッパ状に開き，端部さらに外反し上下に鋭く拡張	外面粗いカキ目， 内面および端部ヨコナデ	胎土密，焼成良好， 色調淡灰色・外面下半に暗緑色自然釉
24	高杯	口径 12.5 ～15.3 器高 9.1 脚裾部径8.5	杯部は斜上方に内湾しながらのび，口縁部若干開き気味，脚部短くラッパ状に開き裾部で短く水平にのびる。端部は肥厚する	杯部底部外面ヘラ削り， 底部内面に仕上げナデ， 他ヨコナデ	胎土粗，焼成良好・焼けひずみ著しい， 色調灰色，黒色・暗緑色自然釉， 完形

(2) 装　身　具

耳環5，勾玉1，管玉2，土製小玉2，ガラス製小玉1，琥珀製丸玉1が出土した。出土地点は，いずれも，仕切石と奥壁の間である。

a．耳環（第12図　1～5）

中実の銅胎に銀箔を貼ったもの（1）と金箔を貼ったもの（2）があるが，遺存状態は悪く大部分が剝落していた。3，4，5は，腐蝕が著しく銅胎のみが残っていた。1は，長径3.3cm，短径3.0cm，断面径0.9cmで重さ26.74g，2は長径3.4cm，短径3.0cm，断面径0.9cm，重さ28.59g，3は長径3.2cm，短径2.9cm，重さ18.58g，4は長径3.0cm，短径2.5cm，重さ7.66g，5は長径3.1cm，短径2.5cm，重さ7.74gである。

b．勾玉（第12図　6）

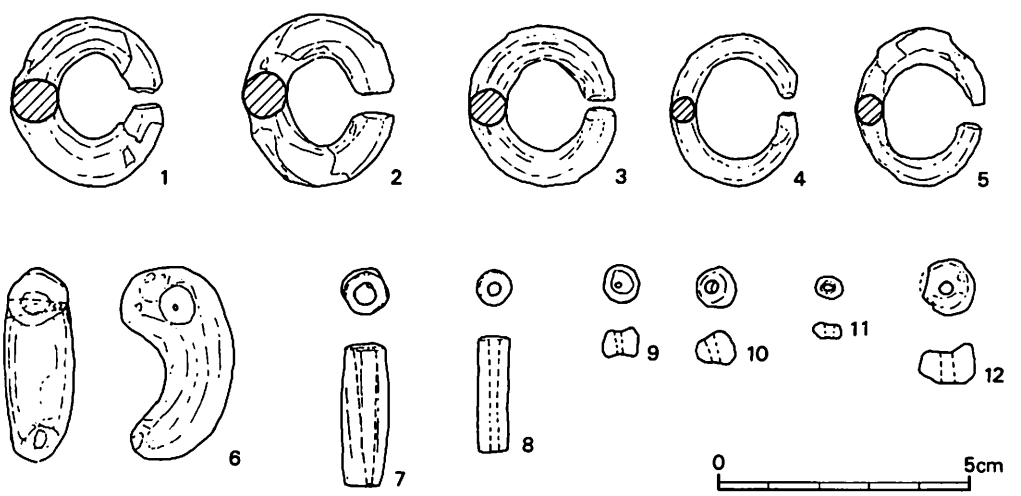
メノウ製。透明感のあまりない橙色でC字状である。長さ3.8cm，幅2.2cm，厚さ1.4cm，重さは12.14gである。研磨調整は，あまり丁寧でなく部分的に稜が残る。穿孔は，一方向よりなされているが，穿孔裏面側の孔周辺を凹ませている。

c．管玉（第12図　7，8）

ともに凝灰岩製である。7は暗緑色で長さ2.8cm，最大径0.9cm，重さ3.55gでやや胴張りで，よく研磨されており，片側穿孔である。8は深緑色で石英等の不純物を多く含んでいる。長さ2.3cm，径0.6cm，重さ1.55g，研磨は丁寧で両側穿孔である。

d．土製小玉（第12図　9，10）

ともに表面は黒色であるが，中心部は淡赤褐色である。粘土を棒状にし，穿孔後，焼き



第12図　石室内出土耳環・玉類実測図（2：3）

あげて切断した様子が窺える。9は径0.7cm，高さ0.55cm，重さ0.31g，10は径0.74cm，高さ0.61cm，重さ0.30gである。

e．ガラス製小玉（第12図　11）

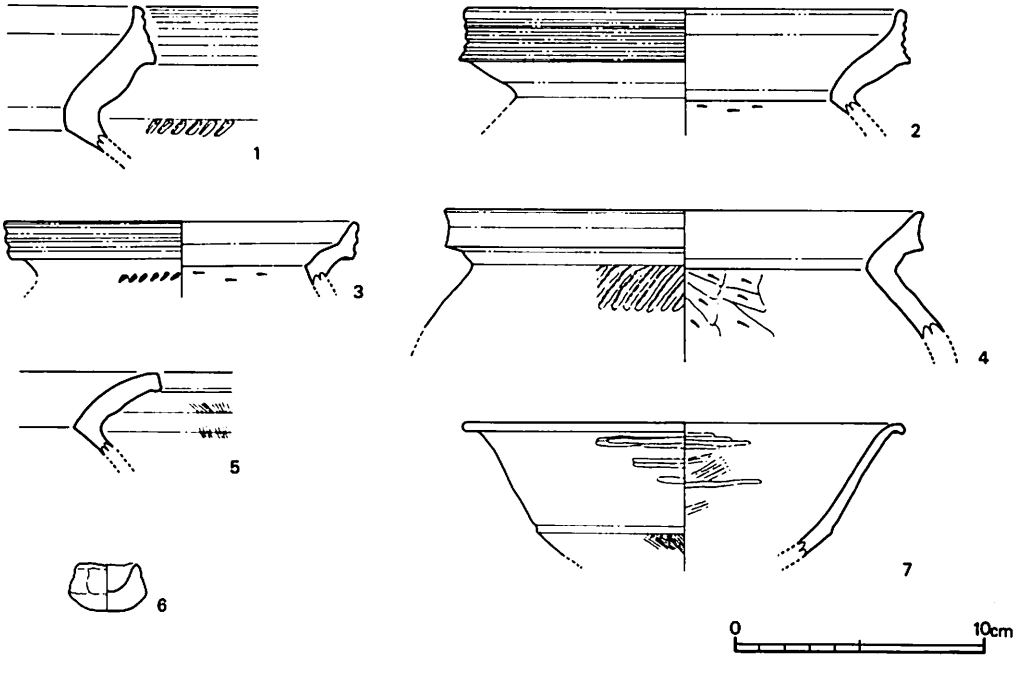
色調はコバルトブルーで，径0.53cm，高さ0.3cm，重さ0.09gである。

f．琥珀製丸玉（第12図　12）

風化がはげしく，遺存状態は極めて悪い。表面は淡黄褐色であるが，断面は光沢をもった暗黄褐色である。径1.2cm，高さ0.8cm，重さ0.43gである。

(3)　その他の遺物（第13図　1～7）

弥生時代後期の甕形土器（1～5），手づくね土器（6），古式土師器に属すると考えられる高杯形土器（7）などが，古墳石室内カク乱土や石室裏込め土などから出土している。これらの土器片は，本古墳に直接伴うものではないが，弥生時代中期末の土器片が散布する皇渡遺跡の存在ともあわせて考えると，本古墳の周辺に，弥生時代後期を中心とした集落が存在していたことを窺わせる。



第13図　包含層出土土器実測図（1：3）

V まとめ

皇渡古墳は，横穴式石室を内部主体とする古墳時代後期の径12mの円墳である。前述のように，石室の奥壁と仕切石の間に河原石と須恵器片を敷きつめた棺床施設を伴う構造をその特色とする。しかし，当地域の古墳の調査は，あまり行われておらず，周辺の古墳との関係やこの地域における歴史的位置づけについては，今後の調査や一層の研究をまたねばならない。

現在，県内で須恵器を床面や底面に敷きつめる古墳や埋葬施設は，本古墳を含めて15例が確認されている[1]。いずれも県北，江ノ川流域に分布し，時期は，6世紀後半から7世紀前半にかけてのものである。このうち，世羅郡世羅西町の鶴首古墳[2]では，竪穴式石室の床面に6世紀後半代の大甕の破片を，また，三次市東酒屋町松ヶ迫B地点遺跡では，小児用の石蓋土壙（SS－3）[3]の底面に，6世紀末～7世紀初頭と考えられる甕の破片を敷きつめている。この他の13例は，いずれも横穴式石室の床面に須恵器を敷きつめたものである。この13例は，敷石の上に須恵器を敷くもの（5例）と床面の上に直接敷くもの（8例）に分けられ，また，その敷き方，使用されている須恵器の種類によって，さらに細分することができる。

敷石の上に須恵器を敷くものには，高田郡高宮町の後原（うしろばら）第1・2号古墳[4]，同成安（なりやす）第2号古墳[4]，同原山古墳[5]，双三郡三良坂町の植松第2号古墳[6]がある。後原第2号古墳は，敷石の上に破砕した大甕の破片を敷きつめている。成安第2号古墳は，把手付鉢，四耳壺，提瓶などの大型須恵器を割って敷石の上に敷いている。植松第2号古墳は，礫床の上に横瓶や甕・壺の破片を敷き，さらにその上に杯類を破砕せずに伏せてならべている。また，後原第1号古墳，原山古墳は，敷石の隙間をうめるような状態で大甕を中心とする大型須恵器の破片を敷いている。

床面に直接須恵器を敷くものには，高田郡吉田町の青山第1号古墳[7]，同甲田町の法恩地南古墳[8]，同谷上第1号古墳[9]，庄原市木戸町の中大平古墳[10]，山県郡千代田町の有岡谷第1号古墳[11]，三次市西酒屋町の久々原第10号古墳[12]，双三郡三良坂町の植松第3号古墳[13]および本古墳がある。青山第1号古墳，法恩地南古墳，中大平古墳，植松第3号古墳は，いずれも大甕を中心とする大型須恵器の破片と伏せた杯類を敷いている。これらは，棺床として使われたと考えられる。本古墳は，杯類を中心に高杯・椀・坩の破片で棺床をつくっている。また，谷上第1号古墳，有岡谷第1号古墳，久々原第10号古墳では，破砕していない杯類を伏せた状態で敷きつめてある。いずれも報告書では，棺床とはしていないが，棺

床として利用された可能性もある。

まず，敷石の有無についてであるが，床面に直接敷かれた須恵器床が敷石の代りという性格が強いのに対し，敷石の上にさらに須恵器床をつくるということは，大甕を石室の内外で破砕する等の祭祀行為に準ずる性格をもつのではないかという指摘がある[5]。しかし，前述したように，敷石の上に須恵器を敷く場合も，同一の形態をとるわけではなく，以下述べるように，使用されている須恵器の種類，取扱いも含めて，今後の検討が必要と思われる。

須恵器床に使われている須恵器に関してみると，甕類と杯類とでは，その取扱いが異なっている。甕類はいずれも破砕されて床面に敷かれているが，杯類は破砕されずに伏せた状態で使用されている例が多い。故意に割ったと考えられるのは，植松第3号古墳と本古墳のみである。また，本来，大甕は山県郡大朝町の龍岩第1号古墳[2]や深安郡神辺町の永谷第1・2号古墳[10]のように，墳頂や石室入口の側面などに置かれていることが多く石室内から完形で出土している例はないようである。一方，杯類をはじめ高杯，横瓶，提瓶などは，一般的に副葬品として石室内に置かれていることが多く，この違いも，須恵器床の意味を考える上で考慮する必要があろう。ただ，石室内に副葬された杯類，高杯などは，次第に本来の意味を失っていったようで，追葬によって，壁際によせ集められたり，石室内からかき出されている例が多くみられる。すなわち，このことは，先に副葬した須恵器の杯類などを追葬の際の葬送儀礼に再利用しなかったことを意味しており，故意に破砕した須恵器甕などもそのあらわれといえよう。須恵器床は，こうした破棄物である須恵器杯類や甕の破片を利用してつくったと考えられる。したがって，このように須恵器床として使用された須恵器類は副葬による本来の意味を失っているといえる。

なお，県外では山陰地方の横穴墓に，須恵器床の類例が数多くみられるが，横穴式石室内に敷く例は知られていないようである[15]。山陰地方における横穴墓の須恵器床は，いずれも大甕を割って敷きつめて棺床または屍床としたもので，杯類などを利用したものはみられない。

以上述べてきたように，県内15例の須恵器床のうち13例は横穴式石室であり，山陰地方で確認されている須恵器床のほとんどは横穴墓で，いずれも追葬を前提としている。しかし，前述の鶴首古墳の竪穴式石室や松ヶ迫B地点の石蓋土壙などの埋葬施設は，追葬を前提としたものではない。これら県内における追葬を前提としない埋葬形態の須恵器床と，横穴式石室の須恵器床とのかかわりについては明らかにはできないが，横穴式石室に須恵器を敷くことがある程度広まった段階で，その影響を受けてつくられた可能性が強い。

本古墳の須恵器床は，奥壁と仕切石との間の床面に，河原石と須恵器片を敷きつめて

いる。河原石と須恵器片との関係は，河原石が西半分に集中するほか，須恵器片が敷かれた東半分にも，いくつか河原石があることから，まず最初に河原石を全面に敷きつめた状態で埋葬が行われた後，何らかの理由（例えば，封鎖石にこの河原石などを再利用するなど）で，抜き取られた河原石によって生じた空間を須恵器片で補塡して敷きつめたと考えられる。その須恵器片には甕類は含まれておらず，杯蓋・杯身も完形のものを伏せた状態で敷くのではなく，他の場所で，または仕切石内で割って敷きつめているなど，前述した各古墳の須恵器床とは若干異なった様相を示している。なお，本古墳の南約 1.5 km に位置する植松古墳群中の植松第 3 号古墳は，径 10 m，高さ 2 m の円墳で，長さ 6 m，幅 1.4 m，現存高 1.4 m の横穴式石室を内部主体としている。奥壁から 1 m の位置に人頭大の角礫をならべて仕切りをつくり，これと奥壁との間の床面に須恵器（杯蓋・杯身・高杯・鬼（はそう）・壺・甕）を割って敷きつめ，石室の主軸に直交して棺を置いたようである。また，奥壁から 3.5 m の位置に封鎖石があり，仕切石と封鎖石との間には棺台石がある。以上のように植松第 3 号古墳は，墳丘規模，石室の規模・構造，須恵器床のあり方など本古墳とよく似た様相を示している。

三良坂町では横穴式石室の調査例は少なく，今後，調査例が増えるにつれて，本古墳や植松第 2・3 号古墳のように須恵器床をもつ横穴式石室の数も増加していくことが予想される。須恵器床における敷石の有無による性格の違い，使用する須恵器の器種による性格の違いなどについては今後の検討に期したい。また，現在のところ，須恵器床をもつ古墳や埋葬施設の分布は，県北と山陰地方に限られている。今後，類例の増加や検討によって，山陰地方の横穴墓における須恵器床との関連も明らかになっていくであろう。

床面に敷きつめられた須恵器以外の出土遺物の中に琥珀製丸玉がある。県内の古墳からの琥珀製玉類の出土例としては，東広島市三ツ城古墳 3 号石棺[16]の勾玉 1，丸玉 3，棗玉（なつめだま）1，福山市石鎚山第 1 号古墳 1 号竪穴式石室[17]の勾玉 2，2 号竪穴式石室の勾玉 1 などがあるが，あまり出土例は多くない。

次に，本古墳における埋葬の回数について考えてみたい。仕切石から南側の部分では，昭和 34（1959）年の調査によって遺物が全て取り上げられているため，埋葬が何回行われたか不明である。しかし，棺台石が残っており，少なくとも 1 回はこの棺台石を利用して，石室の主軸と平行に木棺が置かれたと考えられる。また，先後関係は不明であるが，仕切石と奥壁の間，全面に河原石を敷きつめた段階で木棺を石室の主軸と直交させての埋葬，その後，何らかの事情で部分的に取り除かれた河原石のあとに須恵器片を敷きつめた状態での埋葬が考えられる。さらに耳環が 5 個出土していることや須恵器杯蓋・杯身の分類が可能であるなど，本古墳においては少なくとも 3 回の埋葬が考えられる。

本古墳の時期は，出土の須恵器からみて，中村　浩氏による陶邑編年[18]のII－5期前後が考えられ，6世紀後半の新しい時期と推定される。上下川流域の河岸段丘をのぞむ丘陵斜面には仮屋迫南古墳群，御箱山古墳群，野曽原古墳群，かつえ坂古墳群など横穴式石室を内部主体とする古墳を中心とした古墳群が形成されている。このことは，それまでの谷水田などを中心とした水田経営や畑作が，後期になると土木技術の進歩などを背景に，河岸段丘上の一部にもおよんで，生産基盤が拡大していったことを示していると考えられ，本古墳もそうした生産基盤の拡大を背景につくられた古墳であるといえよう。

註

(1) この他に，庄原市一木町の山神第11号古墳（広島県埋蔵文化財包蔵地調査カードによる），高田郡美土里町横田の背木第1号古墳（高田郡史上巻による）も横穴式石室の床面に須恵器を敷いているといわれるが，詳細不明であるので，この15例から除いてある。

(2) 龍岩・古保利埋蔵文化財発掘調査団　『龍岩・古保利・上春木埋蔵文化財発掘調査報告書』　昭和51（1976）年

(3) 広島県教育委員会・財団法人広島県埋蔵文化財調査センター　『松ヶ迫遺跡群発掘調査報告』　昭和56（1981）年

(4) 高宮町史編纂委員会　『高宮町史』　昭和51（1976）年

(5) 高宮町教育委員会　『原山古墳発掘調査概報』　昭和58（1983）年

(6) 日本考古学協会　『日本考古学年報』24　昭和48（1973）年。ただし，前述したように，ここでは「植松1号古墳」として紹介してある。

(7) 高田郡史編纂委員会　『高田郡史』（上巻）　昭和47（1972）年

(8) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター　『法恩地南古墳』　昭和59（1984）年

(9) 広島県教育委員会・甲田町教育委員会　『谷上第1号古墳緊急調査概報』　昭和58（1983）年

(10) 日本考古学協会　『日本考古学年報』25　昭和49（1974）年

(11) 広島県教育委員会　『城が谷遺跡群発掘調査報告』　昭和48（1973）年

(12) 広島県教育委員会　『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』(2)　昭和54（1979）年

(13) 当センターにより，昭和60（1985）年度に調査。財団法人広島県埋蔵文化財調査センター　『植松遺跡群』　昭和62（1987）年

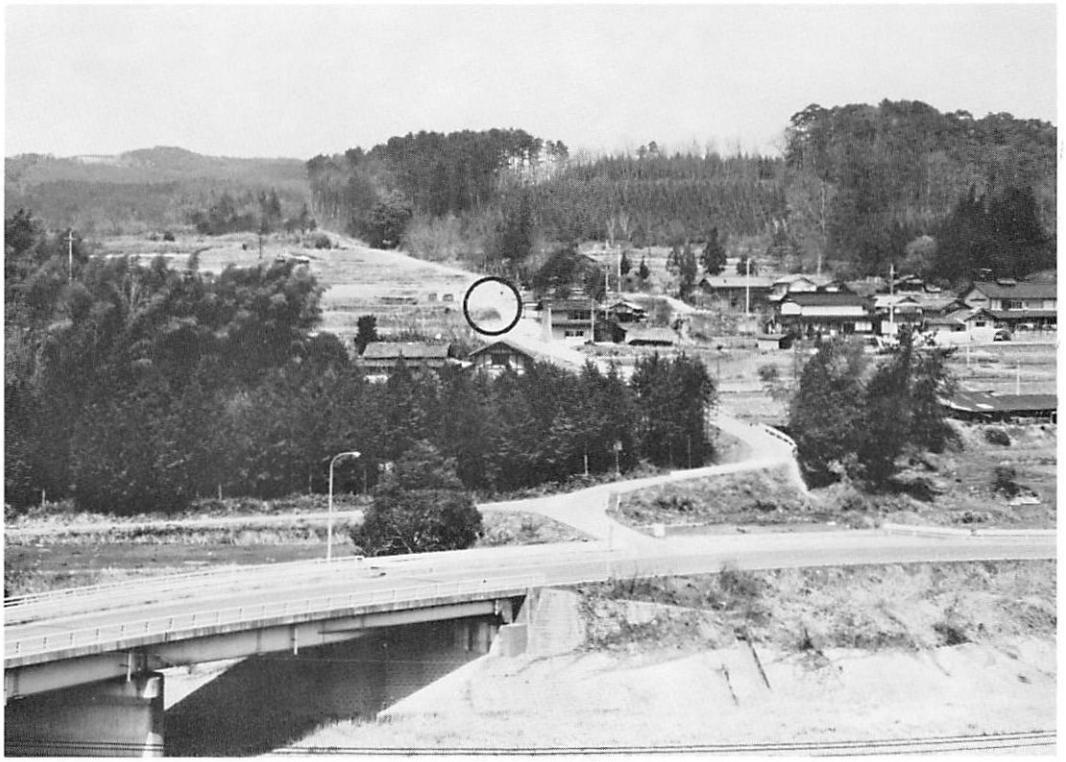
(14) 広島県教育委員会　『緑ヶ丘遺跡群発掘調査概報』　昭和51（1976）年

(15) 鳥取県米子市の陰田（いんでん）横穴群，島根県松江市の十王免横穴群など類例は多い。なお，島根県松江市大井町の山巻古墳では箱式石棺の中に甕の破片が敷かれている。

(16) 広島県教育委員会　『三ツ城古墳』広島県文化財調査報告第1集　昭和29（1954）年

(17) 広島県教育委員会・財団法人広島県埋蔵文化財調査センター　『石鎚山古墳群』　昭和56（1981）年

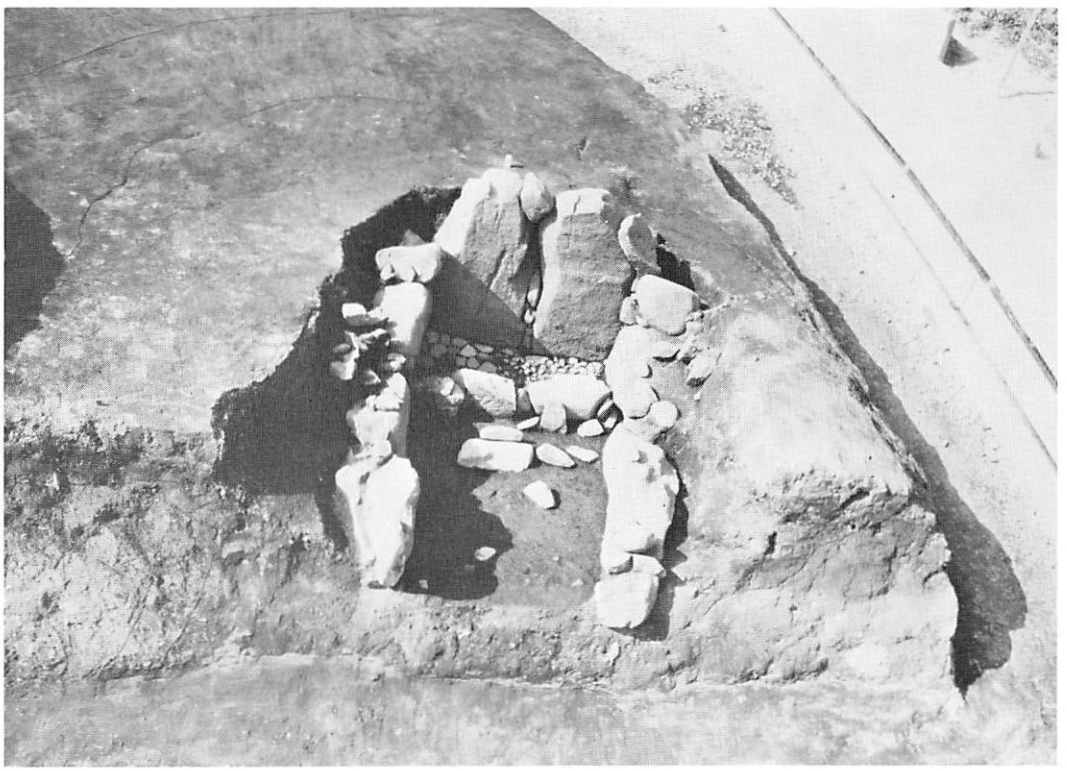
(18) 大阪府教育委員会　『陶邑　III』　昭和53（1978）年



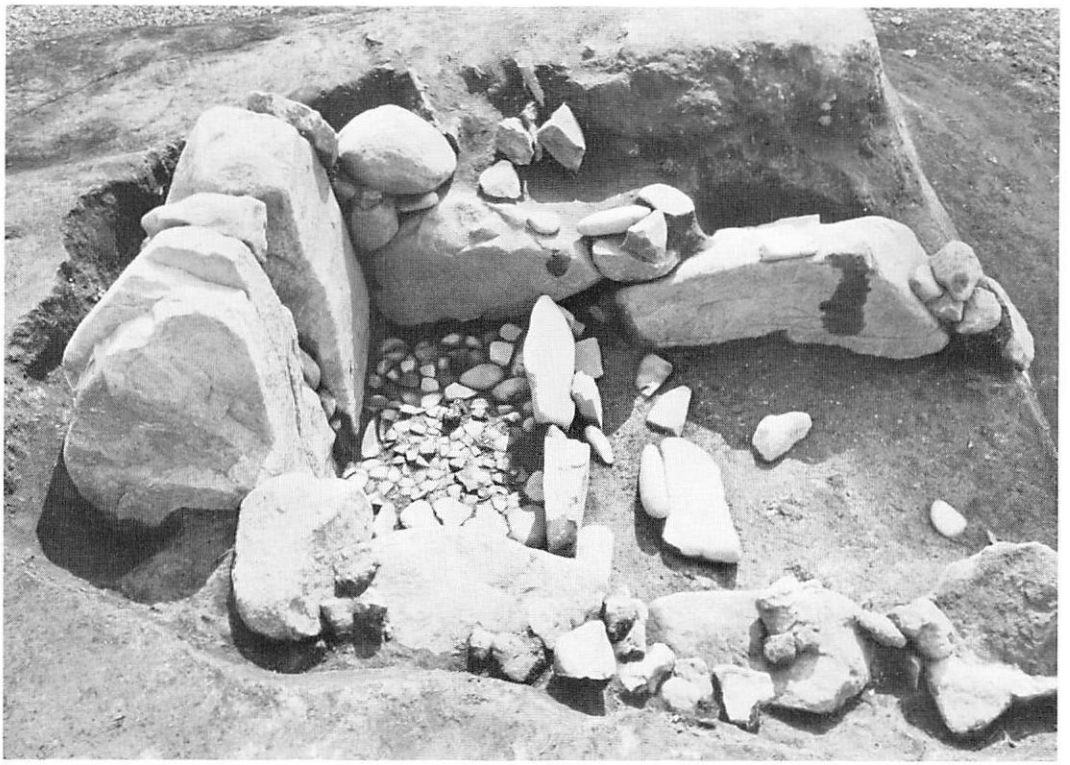
a．遠　　景（南から）

b．近　　景（南から）

a．石室検出状況（南から）



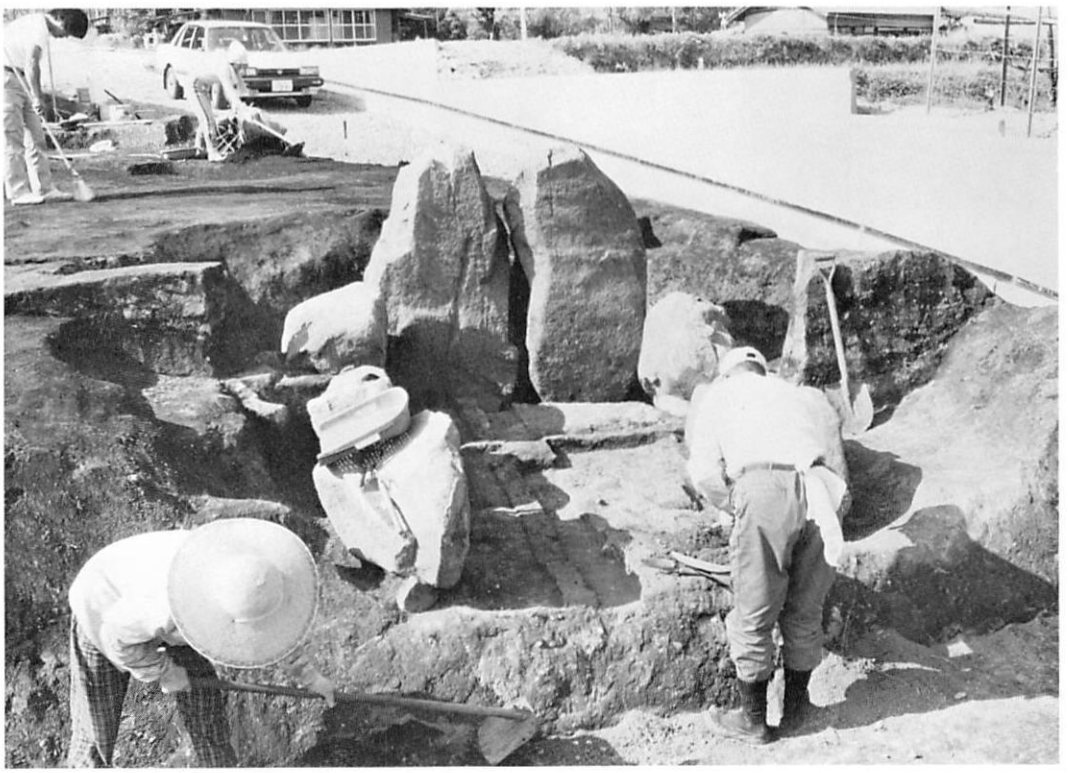
b．石室床面検出状況（南から）



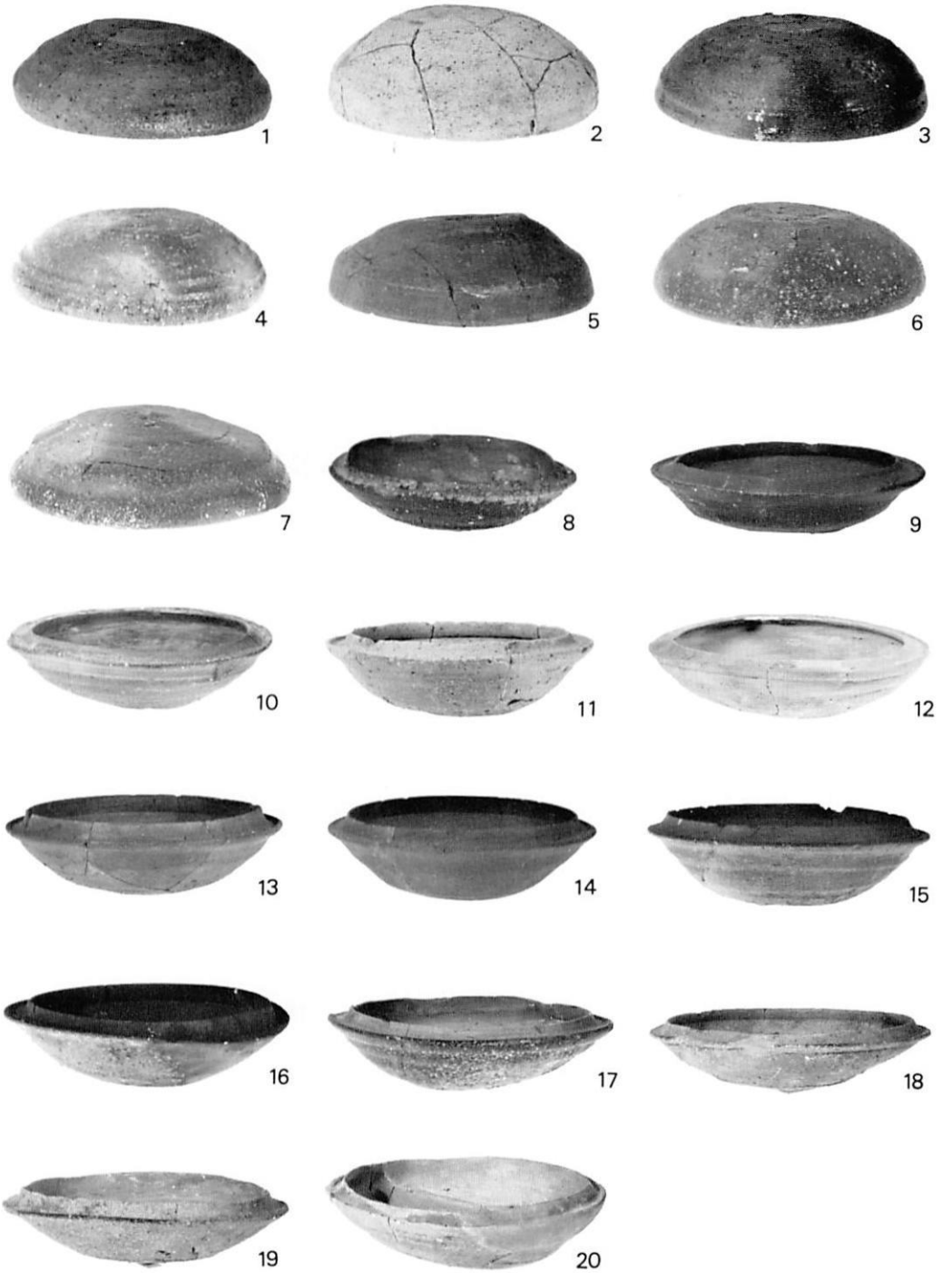
a．石室検出状況（西から）

b．石室内遺物出土状況（北から）

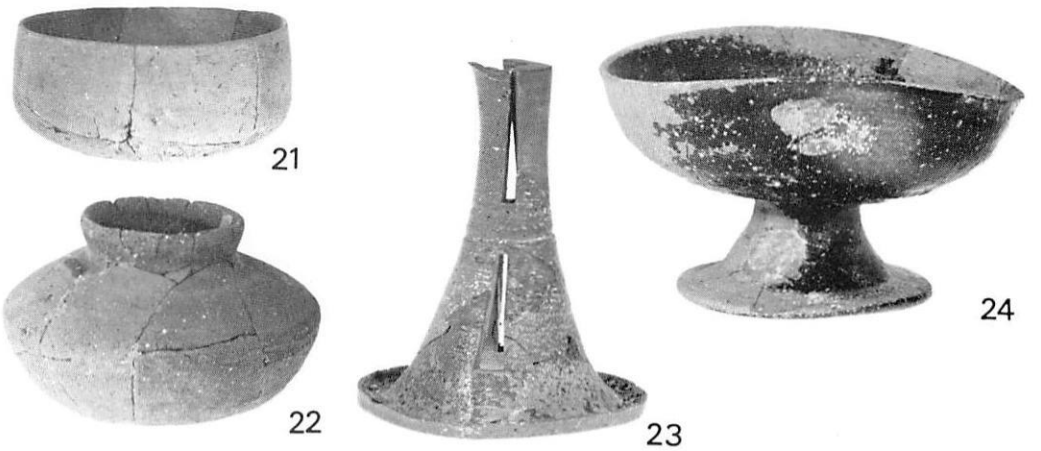
a．周溝及び掘り方の調査状況（南から）



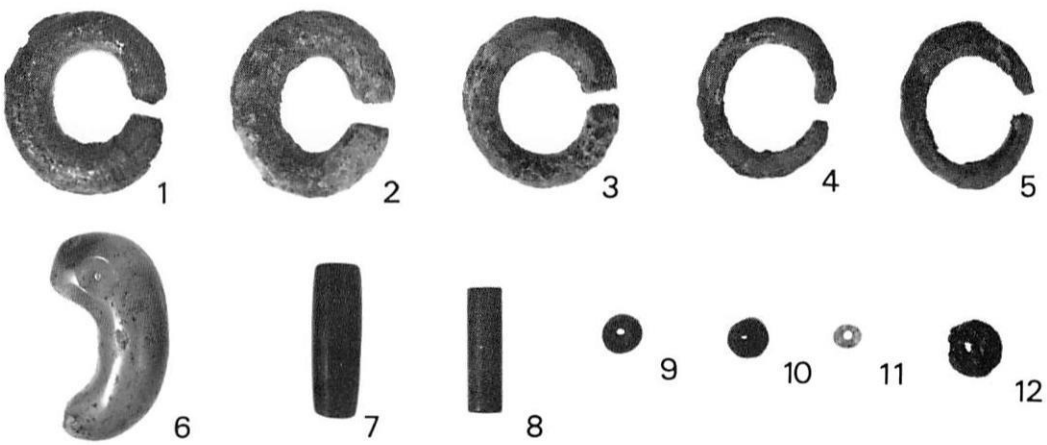
b．作業風景



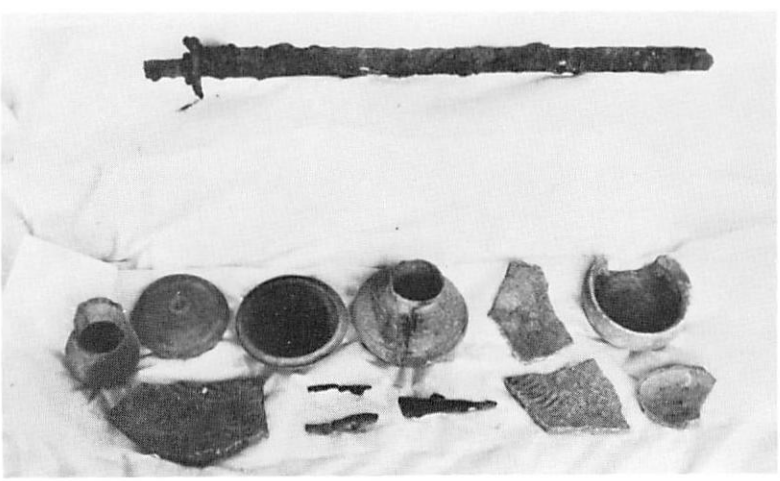
石室内出土土器（I）



a．石室内出土土器（II）



b．同上　耳環・玉類



c．昭和 34 (1959) 年に出土の遺物

広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書 第61集

皇渡(おうわたり)古墳発掘調査報告書

発 行 日　昭 和 62 (1987) 年 3 月

編集・発行
財団法人 広島県埋蔵文化財調査センター
〒733 広島市西区観音新町4丁目8－49
TEL (082) 295－5751

印 刷 所
電 子 印 刷 株 式 会 社